

FUKUCHI

Public
Relations

NO.24
December

広報ふくち

地底が揺れた。

大正3年12月15日、その事故は起こった。

2007
12

日本史上最大の
炭鉱爆発事故。特集

方城大非常

671人。それ以上の死者を出したともいわれる事故が、突然この町をおそった。
大正3年12月15日に発生した「三菱方城炭鉱^{みつびしほうじょうたんこう} ガス炭じん爆発^{たん}」。
しかし、もはや、その惨状を目のあたりにした人はいない。
この事故があったことさえも、忘れ去られようとしている。
かつて筑豊では、坑内災害を日常と反して「非常^{ひじょう}」と呼んだ。
痛ましい炭鉱災害史の中で、この事故は「方城大非常^{ほうじょうだい ひじょう}」と叫ばれる大惨事だった。
93年前に起きた日本史上最大の炭鉱爆発事故は、わたしたちに何を語りかけるのだろうか。
地底の闇^{やみ}に閉ざされた炭鉱史の底に、何が見えるのだろうか――

第一章

その時

→ 炭鉱災害で日本最大の犠牲者を出した「方城大非常」。事故直後、三菱方城炭鉱の正門前には安否を気遣う家族が押し寄せた。大正3(1914)年12月15日の事故当日撮影。写真／毎日新聞社

※ 特集の中の「炭鉱」や「炭坑」などの表記は、基本的に、当時の用字用語を使用しています。





坑内爆発（炭じん爆発）によって巻き上がった噴煙。方城炭鉱の爆発事故は、この写真をはるかに上回る規模だったと想定される。写真／田川市石炭歴史博物館

大地が裂けたようなすさまじい音。窓ガラスが破れ、チョークが跳ね上がり、教室は悲鳴につつまれました。窓の外に見えるはずの櫓が、吹き上がった黒煙に覆われ、地底からの煙は渦を巻きながらしだいにキノコ状の雲となって上空に広がっていく…。まもなく、あたりから「非



周囲が吹き飛んだ爆発後の坑口に坑夫の家族が悲痛な面持ちで押し寄せた。この衝撃で彦山川の対岸にあった三菱金田炭鉱で落盤が発生、1人が死亡、1人が重傷を負った。写真／福岡日日新聞（西日本新聞社の前身）



真つ黒なキノコ雲

――雷が地底をはうような衝撃

方城炭鉱が開鉱してから6年が過ぎた大正3年、第一次世界大戦が勃発し、日本が8月に参戦します。その主要なエネルギーを産出する筑豊も、あわただしく年末をむかえようとしていました。12月15日、みずゆき（みぞれ）が降ること

以外は、いつもとかわらない朝でした。

方城炭鉱近くの伊方尋常小学校では2時間目の授業をむかえ、子どもたちが教科書を開いてまもないころ。時計の針は9時40分を指そうとしていました。「ドドン」。

常や、非常」と叫ぶ声が響き渡りました。当時の証言や新聞記事では「雷が地をはうようにして、一気に吹き上げた」「巨砲10数門を一度に発射したようだ」「8 km四方まで響いた」と、すさまじい爆発音が伝えられています。

パニック状態の「直方七番」 ロープをすぐに



爆風で飛んだレンガでガラスが割れた事務所の電話「直方七番」は、事故発生以来、休まるヒマがありませんでした。事故当日を含む3日間で1千400通の電報が行き来し、金田駅の鉄道の乗降客は4千402人を数えます。現場では悲報でかけつけた坑夫の家族を整理するため、正門から下風坑の坑口に向かってロープが2本、2m幅に張られていました。金田商店街の三村本店は「非常や非常、ロープをすぐに」と、しぼり出すような悲痛な声で連絡を受けています。店主と従業員数人がすぐさまロープを手に駆けつけ、その後、現場では吹き出しを行ったといいます。



方城炭鉱からの連絡の話を祖母から聞いた三村眞作さん（金田新町）

その猛烈な威力は「坑口から10mほど離れた煽風機室が壊れ、四散したレンガの破片が60m先の事務所のガラス戸を打ちやぶって飛び込んだ」「昇降機が櫓の上まで噴きあげられた」「地上では坑口から約200m以内の人が歩いていて倒れるほどだった」などと記されています。明治33年生まれの手島直信さん（弁城・平成3年没）は当時伊方尋常高等小の高等科1年生（現在の中1）。学校から事故現場まで走り、ロープ越しに坑口から底をのぞきました。

「悲鳴とも、叫びともいえないげな切ない声が、つばした（坑底）から聞こえてきよった」と、のちに語っています。

インタビュー

地底の声を聞いた手島直信さんの子

手島 直倫 さん
（弁城 新町）



坑口から何とも表現しがたい、うめき声のような声が聞こえたと父は語っていました。わたしも三井三池の炭鉱爆発で友人を失いましたが、その悲惨さや遺族の心痛は相当なものでした。さらに大規模な方城大非常は、我々では想像もつかない惨状だったと思います。

うなり声やしぼり出すような声が入り交じった息もたええな叫び……。直径約5mの坑口から響いてくる声に「全身を打ちのめされた気がした」といいます。彼はその場にいたたまれなくなり、思わず後ずさりしました。「大事ばい」。激しくなる身震いは、当分おさまらずにありませんでした。



三井田川、日鉄二瀬とともに明治期の「日本三大堅坑」とされた三菱方城。当初その規模は鉱業界を驚かせた。明治45年に発電所を開設し、出炭量をさらに伸ばした。

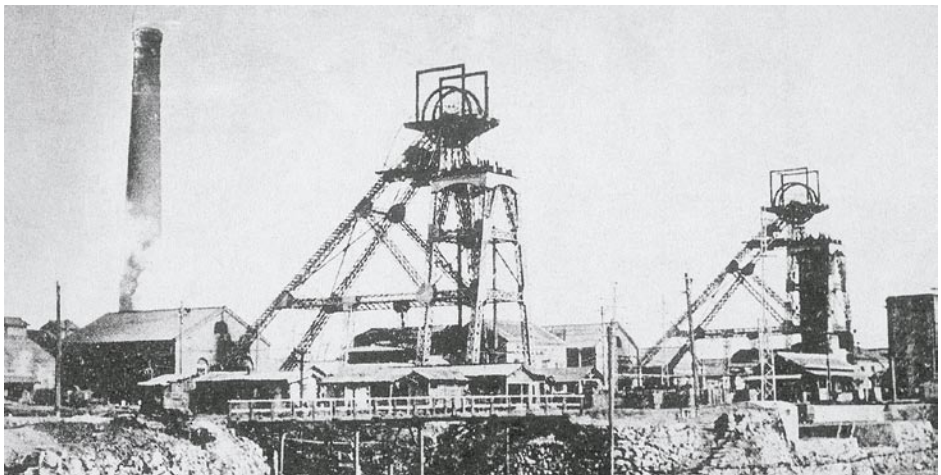
のどかな農村に現れた巨大な鉄塔。高さ21m、見上げるほどの櫓が川筋を見渡すようにそびえました。筑豊炭田に進出した三菱合資会社は、明治29年からの炭層調査を経て明治35年に方城で堅坑の建設に着手します。それまでは、ほとんどの炭鉱が坑夫（坑内作業員）の昇降を斜めに行う斜坑でしたが、三菱方城炭鉱は深部の良質な炭層を採掘するため、新式の堅坑方式（直下型）

を採用しました。深さ270m、当時、東洋一の深度を誇りました。明治41年に第二坑、その2年後に第一坑が完成し、筑豊炭田のトップを切った大型堅坑がこの地に立ったのです。福智山を背景に、誇らしく立ち並んだ両堅坑と赤レンガの煙突は、たちまち「炭都・筑豊」の象徴として、もてはやされました。方城炭鉱は、明治41年に12万ト、5年後の大正2年には26万トを出炭し、めざましい躍進をとげます。方城村も農村から炭都の一角として様相を変え、炭鉱景気にわきかえりました。

↓明治41年の堅坑完成時のもち投げ、炭層調査から12年もの年月をかけた。【写真右】明治37年には早くも金田駅へと石炭輸送用の鉄道引込線が敷かれ、彦山川に鉄橋が架かった。奥に見える建物は金田小学校。三菱は明治43年に金田鉱も買収した。

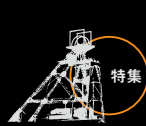


→明治期の採炭現場では、手掘りの採掘が行われた。田川市石炭歴史博物館。【写真下】三菱方城炭鉱の象徴となった両堅坑と赤レンガの煙突。



「大事ばい」。ただの非常ではないことは、だれの耳にも明らかだった。大正3年12月15日、午前9時40分。筑豊炭田、三菱方城炭鉱での大爆発。大地を裂くようにとどろいた音が、この町と人と心を大きくゆるがした。中空で渦巻く黒煙に、人々はおののいた。その時、何が起こったのか。炭鉱で活気づく町を涙と悲痛に一変させた日本最大の事故と向き合う。





煙がおさまった午後2時半ごろ、決死隊に次ぐ「捜索隊」が送り込まれます。しかし豎坑の破損がひどく、坑底まであと6〜7メートルのところ昇降機が停止。隊員は助けを求める生存者の声を真下に聞きつつも引きあげざるをえません。坑底付近の補修は遅れ、やがて用意されたハシゴでどうにか坑底に達します。

そこで、吉澤坑長は夜7時すぎ、池田主任をはじめ技師や医師をしたがえ、夏みかんをそれぞれ口にくわえて入坑します。一行には、福岡鉱務署の目黒技師も加わりました。坑底に達した彼らは、そこで想像を絶する光景を目にします。炭



↑方城大非常の遺体搬出の様子。事故当日の12月15日午後4時に1人目の遺体が上がった。写真／福岡日日新聞(西日本新聞社の前身)

インタビュー

夏みかん投入を目撃した池本喜代蔵さんの子

池本 正義さん
(伊方 局通り)



「いったい、あれだけの夏みかんを短い時間でどこから集めたやろうか」と父が話していました。とにかく、とてつもない量の夏みかんが、坑口から投げ込まれたようです。遺体があがる現場は、思わず目を背けてしまうような悲惨な状況だったと、父から聞いています。

↓水でぬらしたミノやムシロで身を包み
決死の入坑を図る。写真／方城町と炭鉱



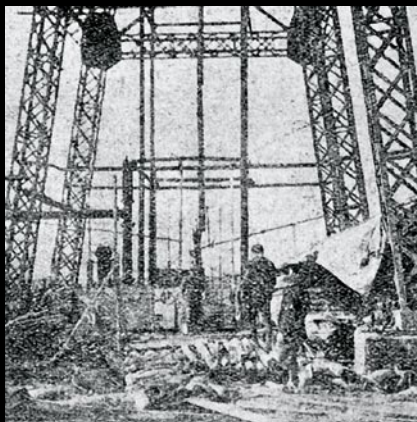
九人の決死隊

―救いの手も届かずに―

救援作業は、明け番(二番方)の坑夫が招集され、赤(坑内係)と白(坑外係)の腕章をつけて行われました。その中から真っ先に坑内に降りる「決死隊」を募ったところ、数十人が名乗り出ます。午後1時、選抜された9人の決死隊は、夏みかんを口にくわえ、鼻で息をしながら、まだ薄煙をはく坑口から降りていきました。しかし、充満するガスで9人はまもなく窒息。地上に運ばれて手当てを受けますが、そのうち5人が命を落としてしまいました。

救援作業は、明け番(二番方)の坑夫が招集され、赤(坑内係)と白(坑外係)の腕章をつけて行われました。その中から真っ先に坑内に降りる「決死隊」を募ったところ、数十人が名乗り出ます。午後1時、選抜された9人の決死隊は、夏みかんを口にくわえ、鼻で息をしながら、まだ薄煙をはく坑口から降りていきました。しかし、充満するガスで9人はまもなく窒息。地上に運ばれて手当てを受けますが、そのうち5人が命を落としてしまいました。

夏みかんを口に決死の入坑。救助の手は、なすすべもなく絶望のふちに立たされた。



レンガ塀が衝撃で壊れ、坑木が噴き上げられた坑口(写真左)。事務所前には犠牲者氏名の掲示場が設けられた(写真上)。写真／福岡日日新聞(西日本新聞社の前身)

炭鉱時代の格差 我部堂と百円坂

犠牲者の遺体は地元の人土葬で、遠方からの出稼ぎの人は火葬にされました。火葬場は「我部堂」の裏と、今はない「湧淵池」。我部堂の裏には幅2メートルほどの細長い溝穴が掘られ、それに沿った4本のレールの上で、棺が石炭を燃料に焼かれたといいます。



16歳ほどの若い修験僧が厳しい修行で亡くなった場所と伝わる「我部堂」。地域交流センターの裏側にあたる。

坑夫の葬儀に比べ、炭鉱職員の社葬は盛大なものでした。花輪が職員住宅街のあった西購売(現購売バス停付近)から事務所まで連なつたといえます。この坂は職員の高給取りを指して「百円坂」と呼ばれてました。坑夫が休みなしに働いて月給20円ほどの時代でした。



九州日立マクセルや赤レンガ記念館に続く現在の百円坂、桜並木の名所として知られる。



↑昇降口から見上げた豎坑槽。ここから坑底までは地下およそ270mもあった。234mの福岡タワーより36mも高い位置から夏みかんが投下されたことになる。

「無情と決死」

ついに起きてしまった。とてつもない爆発だった。何人が生きているのか。うちの人は、父ちゃんは、母ちゃんは…だれもが家族の無事を祈った。つるあせり、いらだち。救助も命がけだった。



すぎる思い

―見えない坑底に非常のあせり―

大非常に直面した坑長の吉澤一磨は、捲揚場付近に対策本部を設置し、ひたすら事態の収拾にあたりました。

まず、なによりの急務は、爆発による坑内の火災をおさめることでした。吉澤は排気坑を密封して火を消し止めた後、巨大な扇風機の回転数を最大に上げて、煙を外に出します。噴煙がようやく見えなくなったのは、爆発後5時間を経た午後2時半ごろ。その間、昇降機が修繕されました。

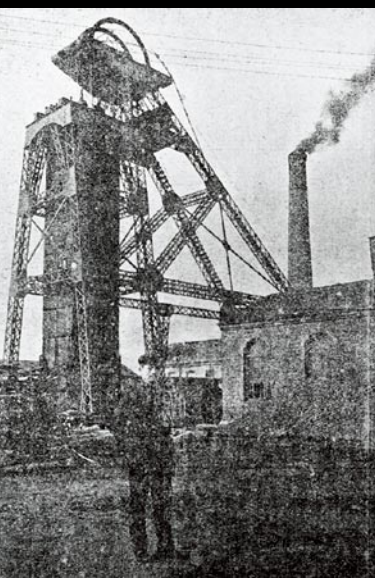
昇降機を降ろす前の、その時です。大量の「夏みかん」が次々と坑内へと投げ込まれました。夏みかんの酸でガスを中和させようとしたのです。このため商店や農家からは、保存用の夏みかんが一つ残らずかき集められました。

ガスと中和させるために投下した夏みかん。しかし有効な化学反応のない、無情な行為だった。

明治35年生まれの池本喜代蔵さん(伊方・昭和53年没)は「2人の係員が、カマス(袋)に入れてある夏みかんを半分に切り、それが撰炭用のザルで運ばれて、坑口からどんどん投げ込まれよつた」と、その場面を目撃しています。

しかし、この夏みかん投入は化学的に全く無意味な行為でした。事実、夏みかんに含まれる多量のクエン酸と坑内のメタンガスや一酸化炭素などの間では、何ら有効な化学反応は示されません。

しかも、坑口から坑底までの高さは270メートル。落下の衝撃が強く、真っ暗闇の坑底では存命の人がパニック状態になつたといえます。「何かにすがってでも助けたい」という現場の思いとあせりがこの夏みかん投入から伝わってきます。



←救助入坑の前、意を決して坑口のそばに立つ池田亀三郎坑内主任。写真／福岡日日新聞(西日本新聞社の前身)



↑ひとたび雪をかぶると、ため息が出るほどに白く輝いた方城の炭鉱住宅。その露地には、大非常で塗炭の苦しみを味わった人々の涙と悲しみがしみこんでいた。家族との別れの冬を耐えた子どもたちは、どこで、どんな胸の火を燃やして生きてきたのだろうか…。



↑方城大非常で救い出された生存者（鉄工所の3人も含まれている）。前列左端が坂本藤市さん、前列右から3人目が見下多十さん。ともにポンプ座で働いていた。

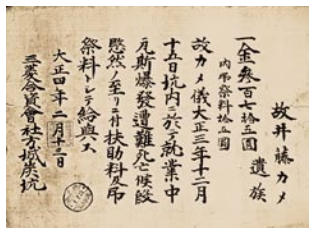


インタビュー
 数少ない生存者だった坂本藤市さんの娘
橋元 光子さん
 (伊方 後谷)

母は「次女をとうとう助けることができなかった」と泣きながら三女のわたしに話してくれました。父は生存者の中で一番長生きし、74歳の命をまっとうします。ショックが大きかったのか、父は事故のことは口にせず、その後一度も坑内に下がることはありませんでした。

いるともささやかれました。その年、方城は正月など祝えるはずもなく、次の日も、また次の夜も、非常のかがり火が鬼火のようにゆらめいていました。

つのる悲しみと不安 遺族への見舞金



↑方城大非常の扶助料証書。(井藤さんは広島県北広島町出身の女性坑夫)

舞金が遺族に支払われましたが、これを坑夫の賃金に換算すると1年7か月分ほどにあたります。金額の多い少ないは、いちがいに言えませんが、働き手を失った遺族には、厳しい生活が待ち受けていました。

犠牲者の遺族には、三菱から見舞金（扶助料）が支払われました。その基準は、坑夫が300円〜600円まで、ほかに弔祭料（葬式代）が150円。職員、小頭（こがしら）職工は300円から1千500円で、弔祭料は給料に応じて150円・200円・300円の3段階が設けられました。のほか、故郷へ帰る遺族には交通費や宿泊費なども支払われています。これに加え、炭鉱への負債（借金）も免除されました。



←遺族の悲痛な声が響く。日本の炭鉱はどれだけの犠牲を生んできたのか。昭和に入っても坑内事故は後を絶たなかった。（三井三池炭鉱の遺族）

乾かない露地

——涙と途方に暮れた遺族

「今あがりよるぞ」「今あがったぞ」。遺体が次々と昇坑されました。筑豊のヤマ（炭鉱）では、霊を導くため、搬送する遺体場所を呼びかける習わしがありました。その声を耳にするたび、帰りを待つ家族の胸は悲しく揺れ動きました。「遺体は4体ずつ重ね、合計8体を昇降機で上げよった」と、遺体引きあげの光景を池本喜代蔵さんは語っています。方城炭鉱発表の犠牲者数は671人、うち約2割が女性で、11歳から18歳が71人（男44人・女27人）もいました。孤児の数は94人。2か所の孤児院が急造され、24人の保育士が昼夜つきつきりで世話にあたったと伝えられています。身内がいる以上、遺体には遺族の確認が必要でした。「ちがう、父ちゃんやな冷たくかわりはてた親の前で、幼子は崩れるようにして泣いた。雪をぬぐった手が、黒くにじんだ。」

↓大非常で最愛の家族を失い、竹馬を横にふさぎ込んでいる孤児たち。写真／田川市図書館



うなずく子…。大非常で父や母を失った人は303人におよびました。女手一つで育てた3人の息子を失った岩本リエさんは、坑口の側に立ちつくし「息子をかえせ」と声をかぎりに数日間叫び続けました。坑口に飛び込まんばかりの彼女の様子を係員がつきつきりで見守ったと当時の新聞に記されています。乳飲み子を背負ったまま夫の遺体にとりすがって泣く人。「あがり酒ばい」と語りかけ、涙をぬぐいながら遺体に酒をふりかける人…。方城炭鉱の露地は乾くまもなく、遺族の涙を吸い続けました。事故翌朝の12月16日、発見場所や名前を記した板を掲げた少年が、タンカに

い。父ちゃん は、こげな 格好やなかつ た。親の遺 体を前にしや がみこむ子、 棺の中を確 認して泣きな がら職員の 問いかけに

乗せられた遺体の先頭に立ち、帰りを待ちわびている家族の目の前を次々と通り過ぎていきます。気がつく、櫓（きこ）のすき間からは、粉雪がはらはらと落ちていました。そのとき、雪をぬぐった手がたちまち黒ずんだといいます。それは、黒い雪でした。爆発で舞い上がった黒煙が溶け込んだ粉雪でした。

ゆらめくかがり火

——年が明けても心の悲しみは明けない

方城炭鉱発表の生存者は21人。生還後まもなく一酸化炭素中毒で亡くなった人もいました。橋元光子さんの父・坂本藤市さんは、数少ない生存者のひとりでした。足を被災した坂本さんを衝撃で目が見えなくなった見下多十さんが背負い、目が見える坂本さんの指示に従って坑底にたどりつき、救助されたといえます。やがて坂本藤市さんは、方城炭鉱の医局に入院。しかし、背中痛みは、日がたつにつれ、ひどくなる一方でした。医師があらためて診察したところ、背中には爆風で飛んだ坑夫の小指の骨が突

「無言の再会」

絶望との対面。変わりはてた遺体が昇坑するたび、むせび泣く声の方城のヤマに響いた。明日からどうやって暮らせばいいのか。僧侶が休むまもない読経に声をからす。やがてヤマ中が悲しみの香煙に包まれていった…。



高さ3cm、幅1cmの小さな像。大非常の犠牲者が身につけていたこのお守りは、約270mの地底から噴き上げられていた。入坑寸前で運よく助かった出口松治さんが爆発直後に拾った。「この像が、わしの身代わりになってくれたかもしれん」と松治さんは常々語っていたという。観音像ともマリア像ともとれる一部がかけたこの像は、娘の出口クニエさんから「方城大非常」著者の織井青吾さんに渡し、現在は田川市石炭歴史博物館に展示されている。



第二章

謎

いつしか、闇のベールに閉ざされてしまった日本最大の炭鉱爆発事故。

いったい何人の尊い命が犠牲になったのか。なぜ大爆発が起きたのか。いまここで2つの謎に迫る。

忘れられたのか。

それとも、忘れようとしたのか。

この町であったことさえ広く知られていない方城大非常。

当時を知る人は口を閉ざしたまま、

この世から去ってしまった。

炭鉱災害史に最も多くの墓標を刻んだ大事故は、

その原因と結果でさえも「謎」に包まれている…。

爆発事故発生後の方城炭鉱の現場。この写真に写っている人々の声は、もはや聞くとはいえない。写真／毎日新聞社



もうひとつの
その時。



→伊方小学校から方城炭鉱へと向かう勅使一行。この日、門司を出発した澤侍従は11時29分に折尾で下車し、遠賀郡役場で昼食。12時54分に金田駅に向けて折尾を出発した。



大

非常の情報は、事故当日に大正天皇の耳に入りました。その2日後、見舞いとして勅使（天皇の使者で天皇の名代にあたる）差遣の知らせが新聞で伝わります。

このため、三菱合資会社の岩崎久彌会長（男爵）は、大正3年12月18日に新設でにぎわう東京駅から方城炭鉱に向かい、現場で細かい指示を出しました。勅使の来村は12月22日と伝えられ、侍従職の澤宣元男爵が勅使に任命されました。



↑事故現場の方城炭鉱を視察する三菱の岩崎久彌会長（右から2人目）

子どもたちは傘もささず

当時、天皇は「現人神」とされ、神としてあがめられていました。その天皇の名代として勅使がはるばる来村するといのです。方城村全体が異様な緊張に包まれました。

伝達の式場に講堂が建てられた伊方小をはじめ、炭鉱や納屋では大掃除が行われます。道は掃き清められ、伊方小の校舎前には白砂をまき、勅使用の通路には布が敷かれました。

12月21日、勅使の澤侍従は午前8時発の列車で東京駅を出発。翌朝下関に着き、船と汽車を乗り継いで、午後2時13分、金田駅に到着しました。

当日は雨が降っていました。金田駅には人力車20台が、伊田や直方からもかき集められ、郡長や筑豊の各炭鉱長、首長、議員らが出迎えます。伊方川の

ほとりから伊方小までの道の両脇に並んだ伊方・弁城の児童生徒およそ千人は、傘もささずに勅使一行を迎え、教師の「最敬礼」の号令で頭をさげました。

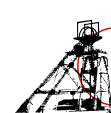
午後2時40分過ぎに勅使が伊方小に到着。講堂で御救恤金（天皇からの見舞金）が県知事に渡され「このたびの非常は、お国のために戦って戦死したのと同じである」との内容の聖旨（天皇からの言葉）が伝えられます。

休憩の後、澤侍従は同校を午後4時に出発し、方城炭鉱を40分間ほど視察。午後5時21分発の列車で金田駅をあとにしました。

このとき、勅使から下賜された御救恤金の2千円や義捐金は分配され、大正4年9月15日に遺族の手に渡されます。伊方小・弁城小の1千31人の児童生徒には、勅使から鉛筆が1本ずつ下賜されたと伝えられています。



↑右が勅使として来村した澤宣元侍従、左は谷口留五郎福岡県知事。伝達式は伊方尋常小学校の講堂で行われ、校舎2階の1号室が侍従、2号室が知事の控え室としてあてられた。



インタビュー

田川市石炭歴史博物館
館長

安藤 龍生さん



千人以上の犠牲者が出た可能性は十分にあると思います。各納屋は入坑者数を把握できていないようですし、未報告の納屋もあるようです。いずれにしても方城大非常の犠牲者数は、発表された671人であっても、2位以下を大きく引き離す日本最大の炭鉱災害です。

千人以上の可能性

招魂碑を手がかりに算出すると……

かつて方城炭鉱の守り神とされた「山の神社跡」には方城大非常の犠牲者をまつた「招魂碑」があります。事故の翌年に三菱方城炭鉱が建立した碑です。その裏には671人の犠牲者を出したという碑文の後に「一坑二坑役夫約三千人」と刻まれています。

また、三菱鉱業社史には「大正4年5月から一部採炭を開始し、労務者数も2千841人となり、大正5年の出炭量は22万3千トで、災害前の水準に復帰した」と書かれています。ちなみに大非常前月の大正3年11月は2万2千トの月産量でした。大正5年の平均月産量は約1万8千6百ト。出炭の能率面から見ても3千人ほどの坑夫がいたと十分に考えられます。

当時の坑内労働は一番方と二番方の、

馬

の数はあっているのに、人の犠牲者数があわない……。今ではどうい考えられないことですが、方城大非常ではそうでした。

三菱方城炭鉱が発表した大非常の犠牲者は671人（男性540人・女性131人）。うち4人が決死隊員で、2人は救出後の死亡としています。亡くなった入坑者は667人。三菱鉱業社史には当時の入坑者が688人と記されているので、21人が助かったことになります。

しかし、当時の新聞記事や資料では死者数が655人から8百人までと、まちまち。一方、犠牲となった石炭運搬用の馬の数だけは、ほぼ11頭（一部は当初6頭と発表）で一致していました。

消えている納屋

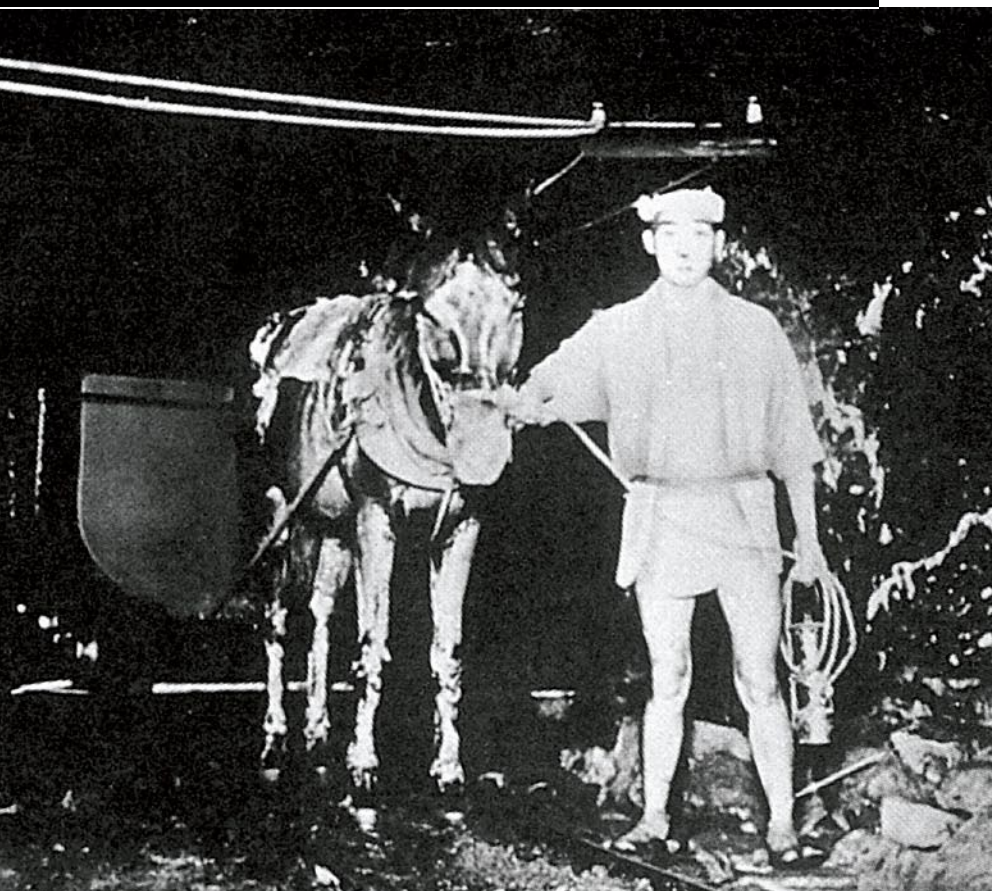
――新聞掲載のない複数の納屋の存在

当時は「納屋制度」といって、炭鉱が坑夫を直接雇用するのではなく、炭鉱と契約する各納屋が、坑夫を坑内へと送り出していました。

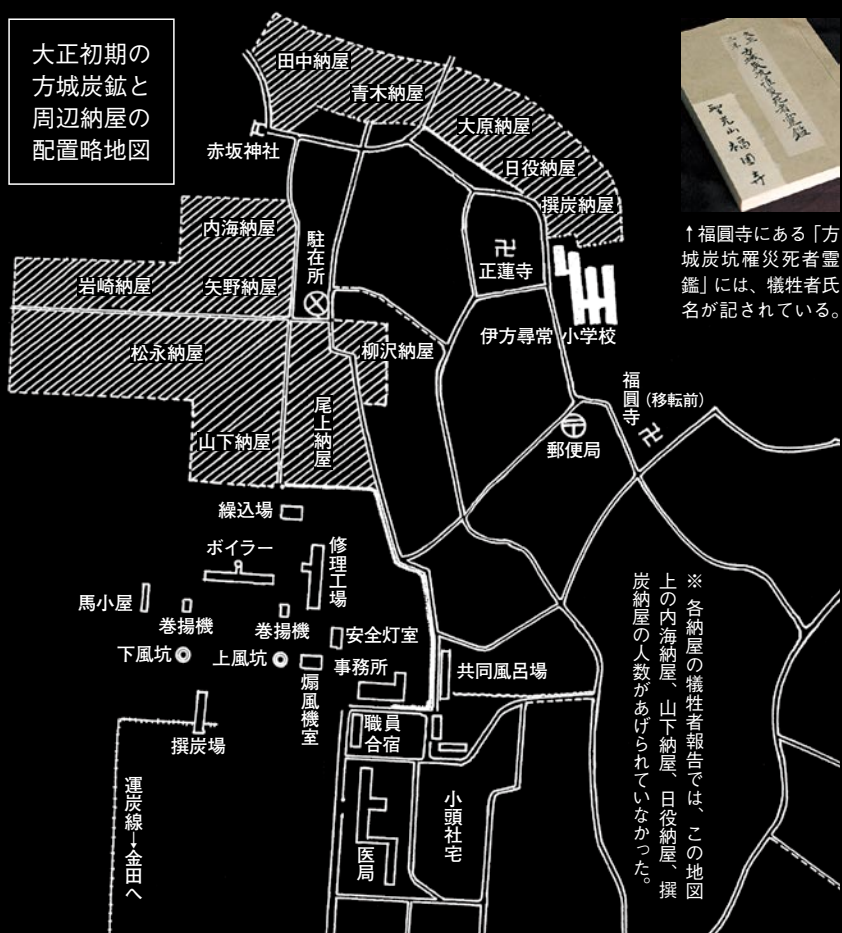
大正3年12月15日の事故後、各納屋が17日・19日・20日と3回にわたって入坑者名簿を事務所に提出します。その数は「福岡日日新聞」に掲載されましたが、3回とも人数はバラバラでした。しかも4百人ほどの坑夫を抱えていたという内海納屋をはじめ、山下、田尻、荒川などの納屋の人数があげられていませんでした。

馬は十一頭、人は

いったい何人が命を落としたのか。当時の「うわさ」は本当だったのか。



当時、石炭運搬などで活躍した馬は、貴重な労働力だった。大非常の復旧作業では、筑豊一円の炭鉱から馬が無償で提供されたという。写真／田川市石炭歴史博物館



大正初期の方城炭鉱と周辺納屋の配置略地図



↑福岡寺にある「方城炭坑罹災死者霊鑑」には、犠牲者氏名が記されている。

※各納屋の犠牲者報告では、この地図上の内海納屋、山下納屋、日役納屋、撰炭納屋の人数があげられていなかった。



坑役夫約三千人、罹災死者蓋六百六座

山の神社跡にある招魂碑、大正4年11月に建立された。表の碑文は、永平寺（福岡県）の慧光玄照住職が揮毫した。裏には「役夫約三千人」と刻まれている。

「方城炭坑罹災死者霊鑑」にない名前 松永義男の墓



父の名と死亡原因が刻まれている松永義男の墓。

我部堂の東側にある墓地には、大非常犠牲者の墓が数多くあります。その中にある松永義男の墓。彼は6百人以上の坑夫をかえた大納屋・松永納屋のあととり息子でした。墓石には大正3年12月15日の命日に続いて「策郎長男瓦斯爆発変死 松永義男 十八才」と刻まれています。裕福な納屋頭の長男は、現場視察のために、たまたま坑内にいたのでしょうか。墓に自らの名前と息子の死因を記した納屋頭である父・松永策郎の無念さがうかがえます。犠牲者で「霊鑑」に記載のない人が多数存在していますが、そこには松永義男の名も記されていません。

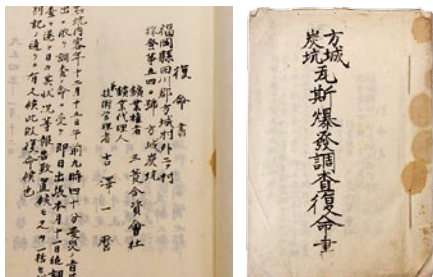
2交代制（一部を除き12時間労働）。一番方の方が10対8の割合で二番方より多かったといえます。しかもこの日は「給料日」で、翌日の16日は月に2回ある「公休日」でした。もうすぐ年末で正月をひかえた12月です。そのような状況を見ると、いつも以上の人数が坑内にいたことは、だれもが想像するところです。

参考までに算出すると、坑夫3千人、一番方が少なめにみて1千6百人。坑内に入らない坑外夫がこの3千人に含まれていたとしても、およそ、どこかの炭鉱も坑内夫8割、坑外夫2割の割合ですから、坑内夫は約1千280人。仕事を休む人がいても大非常当日に坑内にいた人数は「千人を超えていた」と想定することができま。

三菱方城炭鉱発表の大非常で助かった入坑者は、わずか21人でした。当時「千人以上が死んでいる」とささやかれた方城村でのうわさも、まったく根拠のない話ではなかったのです。



採掘現場は炭を掘る先山と運搬する後山がいて、後山は主に女性で担った。昭和8年から女性と16歳未満の入坑が禁止された。写真／田川市石炭歴史博物館



大正4年1月に14人の専門技師団によってまとめられた「方城炭坑瓦斯爆発調査復命書」。7年前に北九州市の古書店で発見され、田川市石炭歴史博物館が購入。当時、主任学芸員の森本弘行氏が活字資料にまとめた。内容は目黒リポートとほぼ一致している。

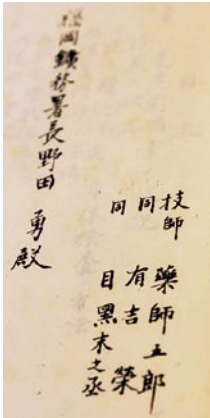
インタビュー

田川市教育委員会
文化課 課長補佐

森本 弘行さん
(伊方 八幡町)



今回、目黒リポートを拝見しましたが、極めて信ぴょう性の高い資料だと感じました。方城大非常は日本の炭鉱災害史上最大の惨事ですが、これを機に国内炭鉱の安全意識が飛躍的に高まっています。この事故が坑内災害を防ぐ全国の教訓になったことも忘れてはなりません。



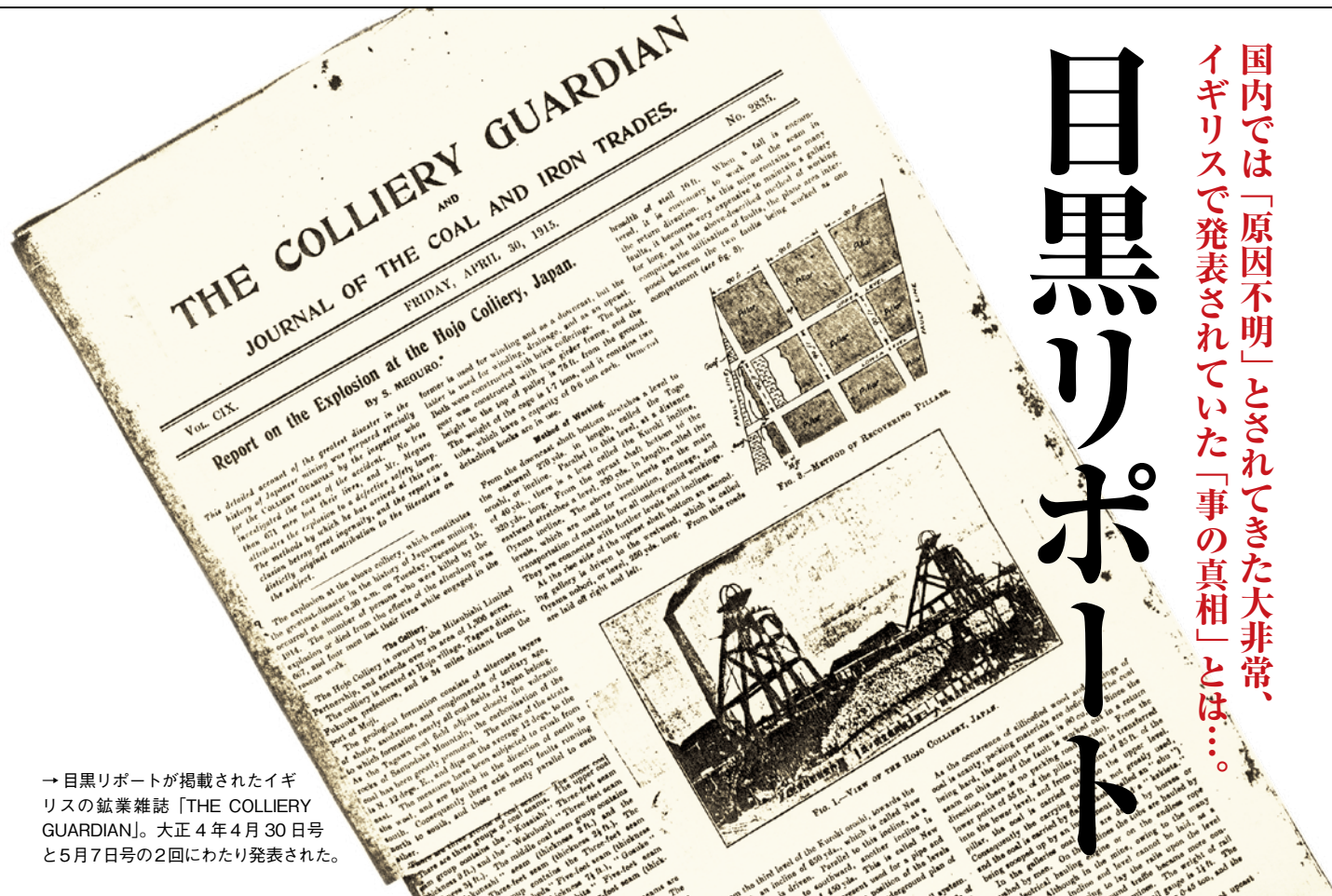
↑大非常の調査復命書をまとめた調査員14人のなかに、目黒末之丞技師も名を連ねている。

↑方城大非常の約8か月後、大正4年5月に筑豊石炭鉱業組合が「安全灯研究場」を直方市に設立。事故を教訓に筑豊をあげての組織的な保安研究が始められた。写真／直方市石炭記念館



△当時の安全灯。坑夫用のトーマス式(写真左)は、灯が消えた場合、坑内で専任の係員が安全灯を管理する火番所(笹部屋)で、別のものと取り替えなければならなかった。自動点火装置がついているウルフ式(写真右)は、炭鉱の職員や小頭などが使用した。資料／直方市石炭記念館

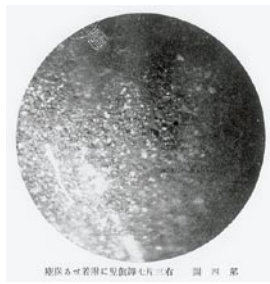
→ 目黒リポートが掲載されたイギリスの鉱業雑誌「THE COLLIERY GUARDIAN」。大正4年4月30日号と5月7日号の2回にわたり発表された。



国内では「原因不明」とされてきた大非常、イギリスで発表されていた「事の真相」とは…。

目黒リポート

発生件数は少ないものの、いったん起きるとドミノノ式に坑内を全滅させます。その際、爆風で生き残ったとしても「後ガス」「シビレガス」とよばれる一酸化炭素で死に至ります。「酸化炭素(CO)は、無色・無臭で感知しにくい気体ですが、その毒性は強力。空気中に一酸化炭素が0・16%でもあれば2時間で絶命、1%を超えると3分以内に人は死亡します。炭じんの発生は水や岩粉をまくことで防げますが、当時は散水などの保安も不十分でした。特に、方城炭鉱のように、深部の良質な石炭であればあるほど、メタンガスも多く発生していました。当初から単に「ガス爆発」とされてきた方城大非常ですが、安全灯の検査の不備、だれかの通気戸の閉め忘れ、そして、散水されず坑内に浮遊した炭じん…。それらの要因が重なって「ガス・炭じん爆発」が起こったと考えられます。しかし「復命書」で報告されたにもかかわらず、なぜ爆発原因が「不明」とされたのか。なぜ目黒技師は国内ではなく、イギリスでリポートを発表したのか。その理由は依然として、謎のままです。



↑大非常後に坑内を調べた京都大学の井出博士も爆発について「いづれにしても炭じんが主動力である」とし、炭じんの燃えカスの写真を「炭坑爆発誌」に掲載した。

方城大非常を受けて規模拡大 炭鉱訓練施設



↑方城大非常の後、10倍以上に延長された救助訓練用のトンネル。通常は非公開。



「大災害となる炭じん爆発を防ぐため、方城大非常を例に、筑豊の全炭鉱が保安向上に努めました」と語る直方市石炭記念館の坂田耕作館長。

大正元年に筑豊の炭鉱会社で合同で設立した炭鉱訓練施設が、直方市に建設されました。ここで炭鉱災害時の救護隊員が養成されます。坑道を模したトンネルは高さ2・5メートル、幅2メートルで、当初の長さは11メートルでした。しかし、大惨事となった方城大非常を受けて、救護訓練が強化され、トンネルは10倍以上の117メートルに延長されます。各社から派遣された訓練生がこの施設で1週間、マスクやヘルメットを身につけて、実践的な救護の訓練を積みました。

ヤマを見守った一本の古木がある。正蓮寺の大イチョウ。推定樹齢は200年を超える。台風
の枝落ちで樹形が変わったものの、風土を年輪に刻んだ風格をにじませている。かつて方城の人々は言った。「大非常のすべてを知っとるのは、あのイチョウだけやろう」と。そして今年5月、その境内に、道をはさんである「伊方古墳」をかたどった「無縁仏塚」が建立された。正蓮寺の長川良願住職が、大非常や強制連行で失われた名もない多くの遺骨をここで供養している。



第三章

大非常そして今の日常

大非常が起きたあの日から、あと数年で100年が経とうとしている。

日本最大の炭鉱爆発事故は、移りゆく時とともに深い沈黙の底に埋もれてしまった。

しかし、真実を知り、心にとどめられる人がいるかぎり、命の重さとともに大非常は浮かび上がる。

日だまりの路地に響いた あの子の声は消えた…。

閉山からおよそ40年。人は去り、ヤマも消え、

もう、古い写真と言葉でしか伝えられない。

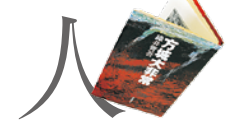
この町にしかない日常に語りかけるメッセージ。

いまここで、ヤマの声を受けとめたい。



方城の炭鉱長屋の路地で「ゴム跳び」をして遊ぶ子どもたち。今では長屋も姿を消し、近隣のつながりも炭鉱の面影さえも消えつつある。

謎を追った



「わたしは運命的に方城と出会った」という織井青吾さん。およそ5年の歳月をかけて28年前に「方城大非常」を執筆した。遺族や当時を知る人のもとにくまなく足を運び、声をつづった。



「わ

たしは、広島に落とされた原子爆弾でかなりの火傷を負っている。毎年8月6日

がやってくるたびに、生き残りの一人として、死んでいった友や多くの人々にかわって自分が必要なべき途を考えた。方城非常との出会いが、そこにあつたといつてもいい」。

昭和54年に発行された「方城大非常」の著者、織井青吾さん。はじめて訪れた筑豊には、まだボタ山が墓標のように立っていました。方城町に足を踏み入れたのは昭和49年5月1日、織井さんのメモ帳にそう記されていました。

「古老から方城大非常の話を聞いて当時の資料などをめくっているうちに、とんでもない事故だと思いはじめた。爆発原因がばかされていてはつきりしない。どの資料も死亡した坑内馬の数は合っているが、人間の数はバラバラ。

これが、わたしにとって方城非常追跡の出発点となった」。

そして織井さんを大非常の執筆へと駆り立てたのは、生まれ故郷「広島」とのつながりでした。

「方城大非常の犠牲者にみられる広島県出身者は全体の10%弱、孤児は20人もいた。原爆で多くの孤児が出たが、その40年近くも前に出稼ぎの炭鉱孤児がいた。この地では坑夫になることを軍隊用語の『志願』という言葉でよんだが、ボタ山がヒロシマに連なっているように思えてならなかった」。

織井さんが方城大非常の取材で、広島県の山間を訪ねたときのことです。

「大非常の犠牲者とその友人の実家は、両家とも小作農家で2百坪しか離れていなかった。わが国全体からみれば、針でつづいたほどの地点。そのなかで5人が炭鉱に出稼ぎに行つて2人

が死亡、さらに原爆で4人、戦死が2人、そのうえ自殺が2人と、あわせて10人の命が奪われていた。そうした史実を近くで生まれ育っているながら、同じような境遇にある自分が知らずに生きてきた。はずかしかった」。

昭和53年12月15日、織井さんの取材活動が思わぬ形で方城に現れました。大非常の時刻にあわせ、役場が哀悼のサイレンをならしたのです。大非常から数えて64年目のことでした。福智山から吹き下ろす寒風の中、織井さんは痛いほどヒロシマの夏を感じたといいます。

『方城大非常』を出版してひとつ心残りがある。広島と筑豊が教えてくれた人々の悲しみ。炭鉱では「非常」、戦争では「非常時」という言葉で命が失われた。できれば「非情」「悲常」という言葉でタイトルにしたかった。織井さんが、二つの故郷をふり返りました。

織井青吾がみた悲常

方城随想

ヒロシマへと連なるボタ山。



織井青吾（おりい・せいご）1931年広島市に生まれる。広島高師附属中学3年のときに原爆被災。シナリオ、ルポルタージュ、小説、評論などを執筆。「地図のない山」「方城大非常」「流民の果て」「なぞの方城炭坑大爆発」など著書多数。早大中退、明大卒。東京都国立市在住。

命とまなざし

悲しい過去を忘れてはならない。目を背けてはいけない。
真実を見つめて

戦史を超える犠牲

―日本発展の礎となった炭鉱殉職者―

炭鉱の歴史は、犠牲の上に書かれた日本の発達史だといわれてきました。明治時代からの町内戦没者は千数十人。町内の炭鉱で命を失った人は、千五百人をも上回ると予想されます。その中には強制労働で祖国を夢見ながら亡くなった人や墓標さえない人も数多くいます。それらの遺骨は、大非常の犠牲者も含め、いま、この町のどこか

で眠っています。石炭産業史より多い命の犠牲を持つ歴史は、戦史以外にないといわれますが、この町では戦没者よりも炭鉱殉職者の数が上回っているのです。

三菱方城炭鉱に閉山前年まで勤めた福田



「毎月1日に、山の神の招魂碑に方城炭鉱の労使が献花し、大非常の犠牲者に手を合わせていました」と振り返る福田文雄さん（伊方鶴ヶ丘）当時、採炭現場の調査や管理をした。

文雄さんは言います。「落盤事故の現場で、故人が大切にしていた懐中時計が持ち主と反して時を刻んでいました。無情に涙したあの場面が忘れられない。命の重さを考えたとき、大非常がどれほどの犠牲と悲しみを生んだのか。過去があつてこそ今があることを子どもたちの心に刻んでほしい」。かつて大非常の日時に響いていた哀悼のサイレン。旧方城町で戦没者と炭鉱殉職者の合同慰霊祭を行うようになってから、鳴ることはありませんでした。今は方城炭鉱の菩提寺であつた福圓寺の慰霊祭で梵鐘の音が響くのみです。列席する遺族や関係者の数は年々減り続けています。

福圓寺の富永武元前住職は「坑内で亡くなり、地底に埋もれたままの多くの人がい



大非常の犠牲者の位牌（写真右）や霊鑑がおさめられている福圓寺では、住職が毎朝夕かざす犠牲者を供養している。「わが子を残して一瞬のうちに、何も分らずに亡くなった数百の霊、その犠牲者の気持ちになって先々代から供養をしています」と富永秀元住職。



↑赤池の松本墓地に点在する無縁仏の墓石。戦時中の強制労働で、方城炭鉱や赤池炭鉱にいた朝鮮や中国からの労働者たちは「生きて必ず祖国に帰ろう」と励まし合いながら、過酷な状況にたえていたという。

日本経済発展の礎を築き、多くの犠牲をはらんだこの町のヤマ。隆盛は誇らしげに伝えられますが、暗く悲しい過去は、長年伏せられていく傾向にありました。

文化財専門委員会副委員長の永末宏之さんは言います。「炭鉱で栄えた時代は、坑内災害を予感させる大非常のことを口にした風潮がありました。そして過去には強制労働で送り込まれた多くの人たちが、過酷な勤務を強いられた末に命を落としています。たとえ払拭したい出来事であっても、わたしたちは真実を見つめ、見極める目を持たなければなりません」。

過去から目をそらすのではなく、向き合うまなざしがあつてこそ、人権や命の重さを受けとめることができます。そうして、沈黙の闇にあつた大非常や多くの犠牲の存在が、この町で浮かび上がってくるのです。



「歴史の表面だけではなく、その意味を理解して欲しい」と語る元教諭の永末宏之さん（弁城迫）。かつて、炭鉱災害の防止をこころざし、明治専門学校（現九州工業大学）に進学した。

大非常のメッセージ

―郷土の史実と向き合う視点―



「子どもたちに失われた命とその重さを感じて欲しい」と語る福圓寺の富永武元前住職（伊方音丸）。旧方城町社会福祉協議会の会長在職中に、哀悼のサイレンと歴史授業をはじめた。

ます。わたしたちは、その人たちが眠る地上で生活している。先人の労苦と命の尊さを忘れてはなりません」と力を込めます。

日本史上最大の炭鉱爆発事故が起きたこの福智町で「方城大非常」の意味さえわからない人は、人口約2万5千人のうち、おそらく半数以上におよびます。まして全国的には事故の存在もほとんど知られていません。町内の小中学校8校で大非常を授業に取り上げているのは、伊方小、弁城小、方城中のみ。さらに、語り部もいなくなり、資料や情報も少なく、授業時間が限られているため、内容も縮小したといえます。

そんな中、地元の伊方小では、12月の人権週間の事前授業として、11月16日に「方城大非常」をテーマに学習。子どもたちは、同年代の犠牲者や遺族と自分を重ねながら、郷土の歴史に理解を深めました。

方城非常唄

いつのころからか、方城でうたわれた唄があります。「方城非常唄」。遺族の悲しみが唄となり、やがて犠牲者のめい福を祈った盆踊りの「口説き」となりました。

豊前田川の名も高き
三菱方城炭坑にて
坑内ガスが破裂して
八百余名の犠牲者を出した哀れな大非常

六番まであるこの非常唄は、かつて事故を目の当たりにした池本喜代蔵さんが、生前、盆踊りで必ず披露していたという唄です。その節まわしが踊りの輪の中から聞こえると、姿は見えなくても「ああ池本さんがやっているな」とわかるほど地元で評判でした。しかし、その唄もいつしか途絶え、今では唄える人もいないと言われています。



方城での盆踊りの輪（昭和34年8月）



インタビュー

町の行財政改革を
主要施策に掲げる

浦田 弘二 町長



父が炭鉱で働いていましたし、ヤマは常に身近な存在でした。閉山、再建、合併と、今も時代の局面をかみしめ、行財政改革を推進しながら、郷土の歴史を誇れるまちづくりを進めたいと思います。基金の助成分は、将来に夢がもてるような事業に活用したいと考えています。

しかし、旧3町が閉山後の事業展開で倒産したように、財政再建後に反動が現れます。再建中に抑えられていた行政需要への対応で借金が増加。旧3町は自治体最大の行革といわれる「市町村合併」を選択します。しかし、新町・福智町では借金も財政

合併再建の山場

いまなお直面する財政危機

しをすでに福智町は経験しているのです。

真の新町に向けて 再建力を福智で

旧金田町が昭和56年度から7年間、旧方城町が昭和57年度から10年間、そして旧赤池町が平成3年度から10年間、財政再建に取り組み、いずれも計画より早く脱却を果たしました。20年近くも財政再建期間を引き継ぐ形となった福智町には、今なお全国から視察が相次いでいます。町の前年度末の借金額は普通会計だけでも約260億円。過去の教訓を生かした再建策と成果が、この町に求められています。



旧3町が財政再建完了後に、数値の推移と今後の方針をまとめた「財政再建のあゆみ」

しかし、昭和40年代後半からエネルギー源が石油へと転換し、旧3町は大打撃を受けます。基幹産業の消滅で人口の半数以上が閉山後に町が倒産

―旧3町すべてが財政再建団体に転落

方城大非常の4か月前に勃発した第一次

試される地力

疲弊から立ち上がり、再生した町の底力が、いま問われる。

旧産炭地・旧財政再建団体に求められる打開策

が町を後にし、労働者人口の大半が転出。多くの失業者と鉱害地が残りました。8割以上を占めた町の財源が、国や県に依存した交付金や補助金、そして借金へと逆転し、閉山の影響は財政構造にとどまらず、人心の疲弊にまでおよびます。旧3町は鉱害地の復旧や失業対策、企業誘致などの基盤整備を進め、やがて厳しい財政状況へと追い込まれていきました。

脱産炭地にあえぐ町の政策は、事業と借金を重ねるという悪循環を招き、その財政はついに破綻。福智町を構成する旧町すべてがバトンをつなぐように、昭和50年代後半から次々と町の倒産を意味する準用財政再建団体に転落していきました。現在、北海道夕張市が財政再建に取り組んでいます。旧産炭地の宿命のような財政の立て直しをすでに福智町は経験しているのです。

国策支援に終止符

―どう生かすか最後の2億6千万円

規模も膨れあがったまま、いまなお財政危機に直面しています。

昭和36年に始まった産炭地振興策で全国の産炭地に投入された予算は、10項目で約3千106億円。失業対策費などを含めるとさらに数千億円が加わるということです。これまで産炭地は国の支援に依存してきましたが、今年、政府は産炭地域活性化基金の取り崩しを認めるとともに、およそ半世紀続けてきた旧産炭地振興策を完全に打ち切ることを決めました。

うち約31億5千万円が配分され、福智町には約2億6千万円が申請により助成される見込みです。この産炭地への最後の助成金で、いかに有効な地域振興策を導入できるかが、いま町に問われています。

国と地方の債務額は、前年度末でおよそ775兆円。自治体の税収や人口を支えてきた企業が海外へと移行する現在の状況は、かつての福智町と重なります。大非常や町の倒産から立ち上がったように、福智町には再生する底力がきつとあるはず。国策に左右されたのは事実ですが、全国の縮図のような福智町が、過去に得た教訓とノウハウを生かし、自立した真の新しい町をつくり上げていく取り組みは、以前にも増して注目を集めています。



↑麻生・貝島と並び「筑豊の御三家」と称された安川敬一郎創業の明治鉱業。赤池炭鉱は明治鉱業の中核として良質な赤池炭を出炭した。かつて明治専門学校(現九州工業大学)の前身である日本初の炭鉱技術員養成学校「赤池鉱山学校」もここにあった。筑豊一の納屋頭・松岡陸平もいた。24時間フル稼働する鉱山は「眠らないヤマ」ともいわれた。今では、整然と並んだ炭鉱住宅の面影もなく、写真右のボタ山は中央公民館などの公共施設や新興住宅地に置き換わっている。

↓昭和44年11月11日、多くの住民が見守るなか、三菱方城炭鉱の煙突が解体された。筑豊では閉山が相次ぎ、ついに最後まで生き残った赤レンガの大煙突も姿を消す。どの町の人口も半減し、再興をかけたまちづくりに着手した。

→石炭の輸送拠点だった金田には筑豊屈指の商店街が形成された。大正11年には映画館「大和館」が開場。「びっくり市」や「ガラクタ市」の発祥の地でもある。その後、エネルギー革命の波にのまれ、芝居小屋やクラブ、カフェなど、数々の店舗が姿を消した。



大煙突

商店街



ボタ山

風化から風土へ

犠牲の上に成り立つ今、課せられた未来へのテーマ。

消えゆくモノとつなぎゆく想い

モノではなく心で

――真実の「心の遺産」を次代へ――

大地を揺るがせた爆音とともに中空で渦を巻いたキノコ雲、黒煙を含む雲から舞い落ちてきた黒い粉雪……。大非常の状況を知ったとき、広島や長崎の原爆を連想せずにはいられませんでした。人口約4千人の方城村で、その5分の1にあたる命が突如として失われた方城大非常は、小さな村にとって、原爆にも匹敵する惨事でした。

「当時の目撃者がすでにいない」「戦時中の炭鉱は撮影不許可なため写真入手は困難」「織井青吾氏の著書も絶版」という状況だった今回の特集。日本最大の炭鉱爆発が起きたこの町の中でさえ「方城大非常」という大事故の感覚は薄れていました。語り継ぐものがいなければ、炭鉱も、そしていずれば、戦争をも風化してしまうような危機感さえ覚えたのでした。

いまの子どもたちが、実際ここに炭鉱の煙が上がっていたことを日常で感じることは、ほとんどありません。かつて天高くそびえたボタ山の存在も、ボタ山の言葉の意味さえもわからないのです。ヤマの時代にはぐくまれた人の心の奥深くにあるボタ山も、過ぎゆく時とともに忘れ去られようとしています。

煙突も竪坑も倒され、炭鉱長屋が姿を消し、そして昨年は、三菱方城炭鉱の本事務所跡も解体されました。ヤマの風景はすっかり変わり果て、かろうじて昔の面影をしのばせるのは、三菱方城炭鉱の坑務工作室（赤煉瓦記念館）と、沈黙した赤レンガ塀だけになってしまいました。「坑夫の血を吸って赤くなった」との逸話が残る、この異様に高い赤レンガ塀を目にするとき、炭鉱が他の介入を許さない場所であったことが感じ取れます。しかし、この赤レンガ塀も老朽化して傾き、崩落の危険性があるため、道路や区画整備の関係から、まもなく壊される運命にあります。

この町に日本経済発展の礎を築いた炭鉱があったことも、日本史上最大の犠牲者を生んだ炭鉱爆発事故が起きたことも、かつて閉山で封じられた坑口のように埋もれようとしています。

ヤマの面影が次々と姿を消していく今、わたしたちが口から口へ、親から子へと語り継いでいくしかありません。風化していく過去は、この町の風土として、心から心へ次代につなぐしかないのです。炭

国登録文化財の赤煉瓦記念館。将来、町のヤマの面影は唯一、ここだけになるかもしれない。



鉱や戦争という大きな犠牲を経て成り立っている現在、そこに生きるわたしたちは「真実の心の遺産を残す」という未来へのテーマを担っているのですから。

インタビュー

大非常について学んだ伊方小学校6年生

長尾 祐稀くん
(伊方 長浦)



方城大非常の犠牲者に自分と同じ年の人があったことに驚きました。両親を失った人はどんな気持ちだったのか、自分だったらとてもたえきれません。日本の発展を支えた炭鉱がこの町にあったことを誇りに思うし、悲しい過去も決して忘れてはならないと思いました。



黙とうを 12月15日午前9時40分、方城大非常のあった日時に町内放送で呼びかけます。町全体の哀悼の意に、ぜひ、みなさんの気持ちを添えてください。



【参考】方城大非常／なその方城炭坑大爆発／流民の果て／福岡日日新聞／方城町と炭鉱／三菱炭業社史【資料提供】織井青吾さん／田川市石炭歴史博物館／直方市石炭記念館／西日本新聞社／福岡寺／池本正義さん／橋元光子さん／田島靖さん／桑野武平さん／前川俊行さん／森本弘行さん